

作／田口浩一郎

劇団！王子の実験室 第二回公演

10min. 夢記

男2名、女1名がそれぞれ登場。男1は、うずくまって七輪に火を起こしている。男2は、その傍で変な歌を録音している。女は、部屋中に目貼を貼る仕草をしている。

男2 (「死ぬ」を連呼する変な歌)

男1 …。

男2 (変な歌)

男1 …気が散るなあ。

男2 …邪魔？

男1 いや…、はい。

女 ねえ。

男2 はい？

女 これで死ねる？

男2、壁際に近づく。目貼りを確認する素振り。

男2 うん、良いんじゃない？

女 イエーイ。

男2 イエーイ。

男1 ダメですよ。

男2 え？

男1 ……その、テープ。

女 はい。

男1 浮いてます。

男2 平気じゃない？このくらい。

男1 ダメですよ。死ぬなら、キツチリ死にしましょう。

女 真面目だなあ、たんぽさんは。

男1 真面目っていうかね…嫌いなんですよ。中途半端なものが。

男2 はは、さすがお役人だなあ。

男1 お役人ね…まあ、市役所ですけどね。

女 ……いいじゃん。市役所。カタくて。

男1 偉そうに人の中途半端をなじる割には…自分が中途半端で。

男2 そうかな…今、大変だよ。市役所入るの。

男1 一応ね、これでも若い頃は夢を見た時期もあつたんですがね。…大学出たら、結局の

ところ手堅く収まっちゃって。

女 夢破れちやつたんだ？

男1 いや、自分から醒めちやつたんですよ。大学入る頃には自分の人生見えてましたから。

男2 ああ…。

男1 ？

男2 不完全燃焼だね。

男1 …ええ。

女 だから死にたいんだ？

男1 いや…それは、違う。

男2 中途半端なんだね…まあ、だから。

男1 そうですね…結局、自分なりの人生を生きなかつたと…という意味で。

間。

男1 中途半端です。

男2 じゃあ、このテープもこのままでもいいね。

男1 ダメです。

男2 何で？

男1 ちゃんと貼って下さい。

男2 自分が中途半端なのに。

女 いやあ…でも、たんぼさんホントまじめ。

男1 しつこいなあ…テープひとつで。

女 だつて…練炭に火つけるのに、そんなに燃料要らないつて。

男1 え…。

男2 ああ…ホントだ。

男1 まだ燃えてないヤツが…。

女 そのうち火が回るよ。

男1 イヤなんですよ。同じ七輪の中で火がついてたり、ついてなかったり。

男2 でも…もつたいないよ。そんなに燃料使ったら。

男1 …不完全燃焼しなきゃ、死ねないんですよ？

男2 うん。

男1 完全に不完全燃焼させたいじゃないですか。

男2 ああ…。

男1、フーフーと炭を拭く。咳き込む。

女 ……先は長そうだね。

男1 スーパー梵天丸さんは。

男2 うん？

男1 どうして死のうと思ったんですか？

男2 ああ…：そうねえ…：別に。

男1 ？

男2 死んでもいいし、死ななくても…：まあ。

男1 はつきりしないなあ。

男2 どうにもね…：どつちでもいいっていうか。

女 じゃあ、死なない方がいいんじゃないの？

男2 いや、死にたいとか、死にたくないとか以前に。

女 ……うん。

男2 この世に執着が持てないんだ。

女 執着？

男2 二十代の頃はね、人間が怖かつただけどき。

男1 対人恐怖症かなんか？

男2 ああ、そうなのかな。とにかく、他人と目も合わせられなかったし、第一、人間と関わりたくなかった。

女 意外。

男2 まあ、でもね…これじゃいけないって、一生懸命克服しようとしたんだよね。でね、克服したわけ。

女 偉いじゃない。

男2 いや…人間に対して無感動になったんだよ。

男1 ふむ。

男2 だから…怖いと思ったり、偉い人を尊敬したり、女性に対して緊張したり…そういうのを一つ一つ分析したんだ。そうしたら、結局…。

男1
∴。

男2
何ほどのこともない。

男1
ああ。

男2
結局、ただの人間。限られた脳細胞と、限られた筋力。せいぜい長くて80年程度生きて、この宇宙にほとんど何の痕跡も残すことなく消えていく。

男1
ただの人間。

男2
そう、過大評価してたのかな∴人間を。人間に何かを期待していたのかもしれない。とにかく、冷静に分析した結果、僕は人間に対する尊敬を捨てた。

すると、恐い人間もいなくなつたし、平気で女も口説けるようになった。人間とコミュニケーションがとれるようになったんだ。瞬間、僕の中で人間の価値は大暴落した。

一瞬にして絶滅したんだよ。実在を信じていた、人間という生き物が。

同時に、僕はこの世界に対する執着を失った。

女
なんで？

男2
僕にとって、世界は人間だったからさ。拒絶された人間の群れに、必死に戻ろうとしたのが僕の二十代だったから。

男1
∴分かる気がします。

男2 自殺サイトを立ち上げたのもさ、ただ、僕みたいな気持の人が他にもいるのかなってさ…。

女 好奇心？

男2 いや、僕って変なのかなあ…って。思つて。

男1 変なことないですよ。

女 要するに、何にもなくなっちゃったわけだ。

男2 ええ、あえて生きていく理由が見つかりません。

女 まあ、でもいいじゃない。何にもないだけ。…あたしなんかさあ。

男2 うん？

女 ありすぎちゃつてさあ。

男1 ああ、そういえば。ミルクタンクさんは何で死にたいんですか？

女 ミルクガールよ。

男1 ああ、すいません。

女 借金ね。

男1 ああ。

女 旦那がね…あんまりウチに帰らなくなっちゃつてさ。寂しくてね…。パチンコにハマっちゃ

った。えへ。

男2
で、借金？

女
そうそう。あたしも働いてるうちはよかつただけだね。何か寂しくなっちゃつて。C

R北斗の拳が出たあたりからズルズルと…。

男1
ああ、あれ流行りましたからね。

女
おかげで、娘は進学できなくなっちゃうし、旦那とは離婚調停中。アパートには毎日、借金取りと催促の電話が来て…。

男2
うーん、分かりやすい。

女
でしょ。もう、死にたくなっちゃつた。

男1
どこかに相談しました？税理士とか。

女
やだ。だつてあれ、節約しろとかいうんだもん。

男1
当たり前ですよ。

女
あたしは、お金使うのが好きなの。

男1
へえ。

女
節約しろだの、破産しろだの。もう、面倒くさいこと言われるんだつたらさ、いつそ…。

男2
死ぬんだ。

女 うん。

男2 なるほど。

男1 じゃあ、私が死にたい理由も聞いてもらおうかな。

男2 え？中途半端な人生だったからじゃないの？

男1 違いますよ。失恋です。

女 失恋？

男1 ええ、それはもう劇的な。

間。

男1 聞きたいですよ。

男2 まあ…ええ。

男1 あれは、僕が大学を卒業してすぐでしょうか…二人の出会いは12年前。湘南のヨッ
トハーバーでした。彼女は赤いリボンの…。

女 待って。

男1 え？

女 それ、長いの？

男1 そんなことないですよ。ほんの13章。

女 長いじゃん。

男1 1章、おおよそ10分ですから…。

男2 二時間以上あるね。

男1 まあ、そりゃ単純なハナシじゃないんで…。

女 13章から話してよ。

男1 ええ…。

男2 10分長いから、ダイジェストで。

女 ああ、いいね。

男1 でも、それじゃ何だか分からな…。

男2 いいんだよ。大体で。

女 上手いことまとめてね。

男1 …じゃあ、努力します。

男1、神妙に咳払いする。耳をそばだてる男2と女。

男1 運命の再会。しかし、その瞬間、あの懐かしい橋から彼女は身を躍らせました。僕ははつと息を飲み…。そして、彼女の命は永遠に失われたのであります。私の大事な切手コレクションとともに。

嗚咽を漏らす男1。啞然として拍手をする二人。

女 何だか知らないけど…ごめんね。辛いこと話させて。

男1 いえ。

男2 亡くなってたんだ。彼女。

男1 はい。

女 残念だったね。切手コレクション。

男1 …はい。

男2 気をとりなおして。人生、悪いことばかりじゃないからさ。

男1 ええ。

女 でも…。

男1 …。

女 もう終わるよ。

沈黙。

男2 …そうだね。

3人、七輪を見つめる。

女 そろそろ…火が回ったかな。

男1 …ええ。

女 …暑いね。

男2 …うん。

ここで男1、寝そべる。怪訝に見つめる男1と女。

男1 寝て…待ちましょう。

目を見合せ、頷く男1と女。3人、七輪を中心に三角形に横たわる。沈黙。

女 ねえ。

男2 …うん？

女 もう死んだ？

男2 まだ生きてるよ。

女 ふーん。

沈黙。

女 ねえ…。

男1 はい。

女 あたし、もう死んでる？

男1 生きてますよ。

女 ふーん。

沈黙。

女 ねえ。

男1 うるさいなあ。

女 だつて…。

男2 …なに？

女 練炭自殺つてさ…苦しいの？

男2 苦しいという人もいれば、眠るようにスツと逝けるといいう人もいる。

女 …人によるのかな。

男2 さあねえ。苦しいのかもね…一種の窒息死だから。

男1 でも、窒息死つて、最後は気持ちがいいんでしょう？

女 聞いたことある。

男1 じゃあ、気持ちいいことを願うね。

女 そうね。

沈黙。

女 あのさあ。

男1 今度は何ですか。

女 もし生まれ変わったら…何になりたい？

男2 もう、生まれたくない。

女 それじゃ、つまんないから何か考えて。

男2 ええ…。

男1 金持ちになりたいです。

女 ああ、いいね。

男1 クリック一発で何億円も稼ぐような。電話一本で何十億も動かすような。…軽快な生き方をしてみたいです。

女 あたしもお金欲しかったなあ。…ねえ、梵さん。

男2 僕は必要ないな。

女 つまんない。

男1 ミルクガールさんは何になりたかったんですか？

女 私はねえ…デザイナー。

男1 いやあ…女性らしい夢だな。

女 で、バリバリ稼いで、ガンガンお金使うの。

男1 うんうん。

女 オリジナルのユニフォームをデザインしい。数多くの映画衣装を手がけてえ。ブライダル業界に殴り込みをかけるのよお。

男1 ほほう！

女 その後、自社ブランドを旗揚げ！有名スポーツ選手からのオファーを容赦なく断つて名を上げるわ！

男1 うひゃー！

男2 はいはい。

女 ねえ、梵さんはどうなりたいの？一人して斜に構えてないでさあ。

男2 僕ですかあ…。うーん。

女 バンドのボーカルとか。

男2 そうだなあ…今と真逆の生き方がいいなあ。

女 うんうん。

男2 僕って印刷屋でさ、地道な仕事だよ。いつも下向いて…。上を見たことなんかなかったんだ。出世しようとか、デカイ仕事とってやろうとか…。

男1 野心的なやつがいいんですね。

男2 うーん。そうね。

女 …政治家とか、野球選手とか？

男2 …ちよつと恥ずかしいなあ。それ。

男1 広告代理店なんかどうです？

男2 ああ…。

男1 サラリーマンだけど、華のあるカンジしません。

男2 じゃあ、それでいいや。

女 ええ…もつとちゃんと。

男2 ねえ、少し静かに…死に際ぐらいさ。

男1 ああ…。

男2 …ね。

女 …ごめんなさい。

沈黙。

女 ねえ。

男2 …もう、なんだよ。

女 子守唄、歌ってよ。

男2 はあ？

女 さっきの、あの変な歌でいいから。

男2 …なんだって。

女 気持ちが高ぶっちゃってダメなのよ。

男2 …。

女 このままじゃ死ねないから…ね。

男2 死ねるよお。

男2、渋々ながら、あの変な歌を歌う。三人、次第に唱和。起き上がる。

男1

39歳、最後の夜。

僕は会社にある、僕宛のメールボックスを探っていた。

雑多な業者からの雑多なメールをかき分け、価値のありそうな情報を探す。

やれやれ、儲けにつながりそうな情報はなさそうだ。

最後のダイレクトメールを一瞥。

まとめてシュレッダーにかけようと思ったその時だった。

「OB各位 ああの逗子の懐かしいクラブハウスで、旧交を温めませんか」

同窓会の誘いだ。

母校の社交サークルからだった。業界に多くの人士を輩出した名門サークル。

こういうのをビジネスチャンスにする連中もいるらしいが、僕の経験上一銭にもなら

ない。シュレッダーだな…。

数分後、僕は週末の予定をキャンセルしていた。

大学時代に一度だけ遊びに行った、逗子のクラブハウスに滞在するために。

同窓会か…思い出なんて、一銭にもならないのに。

世界は、一瞬にしてヤングエグゼクティブ達と同窓パーティーへと変貌する。それらしく演じて

下さい。

男2 あははは、僕の持つてるコネじゃ大したことは出来ないかも知れないけどね。

女 またまた、ご謙遜。

男2 まあ、やってみるよ。

電話でわざとらしく、持ち株の売りを命令する男1。ボーイに電話を下げさせる。

女 あら、たんぼくんじゃない？

男1 ああ、やあ。

男2 たんぼじゃないか、久しぶり。

男1 ああ、梵ちゃんも元気そうで何より。

男2 その様子だとバリバリやつてるみたいじゃない。

男1 いや、すまないね、同窓会にまで仕事を持ち込んで。

女 たんぼくん、今、何やつてるの？

男1 ああ、実はね…。

男1、名刺を取り出す。

女 キヤー！トレーダー！？

男2 すごいじゃないか。

男1 いやあ、はは。

女 トレーダーって何？

男2 知らないんだ…だからさ、企業の株を売ったり買ったりして、差額で儲ける人たちのことだよ。

女 要するにお金持なのね？

男1 まあ、そうかな。

女 素敵！

男2 僕はね、広告代理店。

男2、サツと名刺を取り出す。

男1 ほお、I & S & B & Bメデイアクリエイティブ。

女 ジャパン。

男2 外資系です。

男1 すごいじゃないか。

男2 確定申告してます。サラリーマンなのに。

女 つまり、お金持なのね！

男2 お金持ちかな！

女 素敵！

男1 ミルクガールは何をやってるんだい。

女 私？やだあ、みんなに比べて小っ恥ずかしいから言わない。

男2 何を言ってるのさ、こいつ、スゴいんだぜ。

女 もう！梵ちゃんたら。

男1 へえ、聞いてみたいな。

女 わたしわあ、デザイナー！

男1 デザイナー！

女 ジョン・クリステンセン・ウイヘルム・ガリアーノ・マクイーン・マクミラン・マクガイバーの

専属デザイナーに抜擢されたのよ。

男2 外資系だね。

女 外資系です。

全員、慢心を感じさせる大爆笑。

男2 いやあ、しかし…みんな偉くなったねえ。

男1 偉くなっただけじゃない…キレイになったね。

女 エヘ。

男2 気をつけた方がいいぜ。こいつは手が早いからさ。

男1 はは、やめてくれよ。

男2 将来のある身なんだから。

女 でも、同窓会って危ないわよね。

男1 何が？

男2 もう生まれてるんじゃないか？不倫カップルのひと組やふた組。

男1 ああ。

女 たんぼくんはまだ独身なの？

男1 独身。

女 じゃあ、あたしたちは大丈夫ね。

男1 ……独身？

女 独身。

男1と女、ニタツとスケベそうに笑う。

男2 そういえばさ、思いたさないか？ミルク。

女 何？

男2 昔、このクラブハウスと一緒に遊びに来た事…あつたじゃないか。

女 ええ、懐かしいわね。

男1 二人で？

男2・女 そう。

男1 嘘。

男2 あれ、そういえばたんぼは知らなかったっけ？

女 あたしたち、付き合ってたのよ。

男1 そ…そうなんだ。

男2 ああ、黙ってたかもな。当時は…シヨック受けるとカワイソウだと思つてさ。

女 シヨック？

男2 ああ…たんぼもミルクに惚れてたんだよ。

女 ええ！そうだったの？

男1 あ、はは…まあ。

男2 でも、不思議なもんだよ。サークルの中でも一番遊んでたたんぼがな…多少、口説いたりとかしたのか？

女 口説かれたっけ？

男1 口説いてないよ。第一、私、遊んでました？

男2 遊んでたよ。

女 うん。

男1 あ…ああ、そうか。遊んでたかな…。

男2 僕はたんぼの軽快な生き方に憧れてたんだ…うん。

女 私には積極的だったよね。梵ちゃん。

男2 奥手の僕がね…。当時は純朴そのものだったのに。な？

女 うん。

男1 で、できあ…。

男2 はい？

男1 ふ…二人は、どこまで行ったわけ？

男2 え、何？大人の質問？

女 もう、やだあ、たんぼくんたらあ。

男1 ほ…ほら、聞きたいじゃないですか。参考までに。

男2 そりゃ、行くところまで行ったわな。

男1 純朴だったんでしょ？

男2 いつまでも子供じゃないからな。

女 大学生をナメたらダメよ。

男2と女、スケベそうに目を見合わせて笑う。

男1 ……そうか。

女 あら、シヨックだった。

男1 え…いや。

男2 そんなワケないじゃん。こいつが学生時代どれほど遊んでいたか。

女 それもそうね。

男1 そんなに遊んでた？

男2・女 遊んでた。

男2 ちよつとばかり惚れてた女が、誰と寝たとか、ホテルに行ったとかぐらいで傷つくようなタマじゃないよ。

男1 ホテル！

男2 ホテル。

男1 ホテル行つたの！？

男2 そりゃそうだよ…その辺じゃやんないよ。

女 もうやめてよ。ホテルホテルつて。

男2 はは、すまんね。

女 それより…懐かしいわね。ホントに。

男2 ああ…。

これより男1、二人に背を向けてブツブツと独り言を言うようになる。明らかにショックを受けている。

女 覚えてる？ちようどこの隣の宿舎に泊まったのよ。

男2 ああ、そうだったね。

女 二人でヨットに乗って…少し沖合いに出て…。

男2 ああ…船舶取ったばかりで…ちよつとした冒険だったね。

女 また行かない？

男2 よし、明日行こう。

女 え？

男2 折角の同窓会だからね。明日はオフにしてあるんだ。

女 キャー、素敵。

男2 ミルクの予定は大丈夫？

女 そういうことなら、いくらでも空けちゃうわよ。

男2 よし、今日は飲むか。

女 じゃあさ、この上にラウンジがあるからそこにしない？

男2 ラウンジ？

女 うん、夜景が見えるらしいよ。

男2 うーん、ラウンジもいいけどさ、この最上階がホテルになつてゐるのは知ってる？

女 え、そうなの？

男2 サークルの一期生が金に飽かせて作ったらしいよ。会員制の。

女 へえ。

男2 どうせならそこで飲まない？

女 え？

男2 実はもう、部屋取つてあるんだ。

女 …。

男2 夜景なら高いところの方がいいだろ。

女 うーん…でも、まずはラウンジで…。

男2 善は急げつていうじゃないか。そうだ、こんなゴミンゴミンした所で飲んでないでさ、さっさと上にあがろうよ。おいしいワインも用意してあるんだぜ。

男2、女の手を握つて歩き出そうとする。女、男2の手を振り払う。平静を装いつつ、明らかに喜んでいる男1。

女 …。

男2 何だよ。上のホテルじゃ不満かい。

女 何よ！さつきからホテルホテルつて！

男2 じゃあ、ヨットハーバーにある隠れ家的…。

女 ホテルはもういいわよ！

男2 あ…そう。

女 なに…？あたしの体だけが目当てなの？

男2 はあ？（呆れたように笑う）

女 折角の再会なのに！ガツガツしちやつて。

男2 お互い大人なんだからさ。小娘みたいなこと言わないでよ…。

女 ガツガツしてるのが大人なの？

男2 (ため息)…取り乱さないでくれる？

女 …え？

男2 時間のロスだ。

女 時間…ロス？

男2 お互い忙しい身じゃないか。ロジカルに行こうよ。

女 …。

男2 余裕ある振りしたつてき、僕らみたいな立場になれば分刻みで行動してる。丸一日の

休みなんて滅多にや取れない…四の五の口説いてる暇なんかないんだよ…アバンチュールを楽しむにしたつて。

女 …でも。

男2 まったく…ガキは疲れるな…。

女 なんですつて！

…ここで、男1が「いやあ、喧嘩かい？」とかつて言って、二人の間に割って入る。(竹内まりやかなんかを歌っててもいいかもしれない)

男1 まあまあ、ここは二人とも抑えて抑えて。

男2、聞く耳持たず、女に背を向ける。そして、何故かギターを抱える。

女 あの人、変わったわ。

男1 あはは、変わらない人間なんていないさ。

女 でも、昔はもつと草食系っていうか…。

男1 しょうがないよ、肉食にならざるを得なかったのさ。長い進化の過程でね。じやなきや、サラリーマンで確定申告なんて無理無理。

女 私は、私をチャホヤしてくれる金持ちの草食系男子が好きなの。

男1 ここに居るじゃないか。

女 え…。

男1 僕はさ…遊びの女に対しては、どう猛極まりない肉食恐竜なんだけれど…本命の女性に対しては、臆病で温和な草食恐竜チャオヤントカゲとなってしまうのさ。その証拠に…。

女 …。

男1 僕は大学時代、君を口説けなかった。

女 …。

男 ね。

女 …じゃあ、今は？

男1 口説いてるじゃないか。

女、わざとらしくときめく。男1は終始カッコよくポーズを決めている。男1は歌とギターで、何故か雰囲気盛り上げている。

女 まずは、ラウンジでオシャレなカクテルでも飲んでいいかしら。

男1 いいとも。

女 いきなりホテルに行かなくてもいい？

男1 いいよ。

女 キスは3回目のデートまで待つて。それから先は、私に使ってくれたお金の額によって決めるわ。金持ちよね？

男1 金持ちだよ。

女 ああ……素敵。チャホヤして……骨の髄までチャホヤして。あたし、チャホヤされるの大好き。

男1 もう、してるさ。

女 もっと……もっとチャホヤして。女はチャホヤされるとキレイになるのよ。

男1 キレイだ。

女 ああ……。

男1 知的だ……。

女 ああ……。

男1 美しい……あの夜景よりも。

女 ああ……お金とチャホヤと夜景。完璧だわ。

男1 見てごらん、あの光の一つ一つを。

女 ええ。

男1 それぞれに生活があつて、家庭があつて……。

女 ……うん。

男1 なあ、いつかは二人、あの中の一つに……。

女 …プロポーズ？

男1 そう考えてもらつてもいいかな。

女 キャー、電撃的！

男1 どうだろう。あの辺のマンションを買つて。

女 買うの？賃貸じゃなくて？

男1 賃貸でいいの？

女 買つて。

男1 だよねえ。そうだ、あの最上階当たりの部屋をさ…週末は毎週ホームパーティーを

開こうよ…あれ？

女 どうしたの？

男1 あの部屋…あの部屋だけ電気点いてない。

女 は？

男1 どうしたんだろ。

女 何が？

男1 僕こういうの許せないんだ。ボーイ…森ビルに電話つないで。

男1、森ビルにマンシヨンの明かりを点ける交渉を行う。呆気にとられる女。と、ここで男2が女に捧げるラブソングを歌い出す。女、感動。

男1　じゃあ、頼んだよ。金に糸目はつけないからさ。森社長によろしく。

女　それ…もうしかして。

男1　いや…あはは、待たせたね。うん、まあ…単刀直入に言おう。

男2　昔、ミルクのために作っていた曲。…今日、完成したよ。

女　素敵イイイイ!

男1　今夜、君を抱きたいイイイ!

女、男2に向かって走り出す。男1、女に抱きつこうとしてこける。そのまま苦しみます。

男1　うーん、どこだあ、ミルクう。君が見えない…。

女　たんぽさん…。たんぽさん…。

男1　…っは。

女　平気？

男1 ……僕は？

男2 ひどいなさされてたよ。

男1 ……夢か。

女 何の夢見てたの？

男1 いや……金持ちになった夢を…。

女 あ、あたしも同じような夢見てた。

男2 へえ……奇遇だなあ。僕も同じ夢見てたよ。

男1 みんな……そうだ……みんな出てきた。

男2 じゃあ、みんな金持ちなんだ？

男1 ええ。

男2 ふーん……面白いね。僕のもやっぱり、みんな金持ちだったよ。

女 ……死ぬ前にいい夢見たわ。たんぽさんも梵さんも異常に羽振りがよくて…。

男2 ……にしては、うなされてたじゃない。たんぽさん。

男1 途中までは良かったんですけどね。最後がイマイチ…。

男2 僕はずつといい夢だったけど…。

女 やつぱりあれかしらね。死ぬ前に見る…。

男2 何それ。

女 お花畑が見えたとか、神様に会ったとか。…言うじゃない。

男1 ああ、やたら気持ちのいい夢を見るってやつでしょ。

女 そうそう。

男2 ええ…でも、あれって昏睡状態とかそういう時でしょ…。

女 じゃあ、昏睡状態だったんじゃない？

男2 …。

女 よーし、今度はもつといい夢見てやる。

男1 僕は…もろいいかな…。

女 えー、何で？

男1 結局、夢の中でも愛する女を失って…。

女 …ああ。

男1 金持ちになったって同じだ…この現実を生きてる限り。僕は…報われない仕組みになつてるんだ…。(泣き始める)

女 じゃ、じゃあさ、いつそ非現実的な夢を見ましょよ。

男1 …非現実。

女 そうそう。お金持ちとか…そういう夢のないやつじゃなくて。

男2 ウルトランマンになりたいとか？

女 それ！そういうこと。

男1 …いきなりそう言われても。

女 駄目よ、考えたら。

男1 うーん。

女 パツと頭に思い浮かんだやつを。

男2 ヒットラーになりたい。

女 え？

男2 だめ？今、パツと頭に浮かんだんだけど。

女 いいけど…なんでなりたいの？そんな物騒なものに。

男2 僕と正反対だからさ。ヤル気のかたまりで。社会をああしてやろうとか、この人種をこうしてやろうとか…。ありえないんだよ。僕にとつて。…ウルトラマン以上にありえない。

女 そうなんだ。

男2 僕なんて…社会とか人間とか、消えてしまえばいいとしか思えないのに。

女 たんぼさんは？

男1 チングス・ハーン。

女 へ？

男1 ありえないんですよ。あの男らしさが、僕にとつて。

女 ああ、そうかもね。

男1 戦う。奪う。殺す。征服する。…僕、全部やったことない。

女 そりゃ、ほとんどの人がやったことないわよ。

男1 ミルク・ガールさんは、何になりたいんですか？

女 うーん…ドラえもん。

男1・2 …。

女 ドラえもんになりたい。

男1・2 …いいよ。

男2、あの変な歌を歌う。三人、次第に唱和。立ち上がって円を描くように歩く。

男2 (ドイツ語らしい演説)！

男1 うはははは！殺せ！

女 ぼく、ドラえもんです。

男2 (ドイツ語らしい演説)！

男1 うはははは！奪え！

女 ぼく、ドラえもんです。

男2 (ドイツ語らしい演説)！

男1 征服しろく！

女 ぼく、ドラえもんです。しずかちゃん…。

全員、その場で倒れて苦しみ出す。

男2 やっぱり成立しませんでしたね。

女 何、今の…夢？

男1 おえー！（嘔吐）

女 死ぬ直前の夢は気持ち良いんじゃないの？

男2 …おなか空いてるせいかな。

女 …ああ。
男2 おなか減らない？
男1 ああ、ええ…そういえば。
男2 これじゃ死んでも死ねないよね。
女 肉とか焼こうよ。
男1 あるんですか？
男2 ないよそんなもん。
女 なあんだ。せつかく七輪とかあるのにさ。
男2 肉焼くために買ったわけじゃないからね。
女 何か食べ物ないの？
男2 全部捨てたよ。
女 ええ…。
男2 これから自殺しようつてのに…食べ物なんかあつても腐らせちやうからね。
女 腐らせちやつてもいいじゃん。どうせ、死ぬんだから。
男1 やめましょうよ。
女 え。

男1 イライラしてもお腹減るだけですから。

女 …うん。

男2 しかし、嫌だな…このまま空き腹抱えて死ぬなんて。

男1 …そうですね。

男2 まあ…とりあえず寝よう。

全員、横になる。

女 あー…お肉食べたい。

男1・2 …。

女 半生に焼いたお肉食べたい。

男1・2 …。

女 半生に焼いて、甘辛いタレをかけたお肉食べたい。

男1・2 …。

女 キムチをつけて。

男1・2 …。

女 半生に焼いて、甘辛く味付けした…。

男2 あああああああ！

女 どうしたの。

男2 食べたくなっちゃった！肉、食べたくなっちゃった！

女 …この世に執着が持てないんじゃないじゃなかったの？

男2 …。

男1 どうします？買ってきますか？

男2 だめだよ。そうしたらまた最初からやり直しだよ。

男1 …死ぬのも難しいですね。

男2 …うん。

男1 早く寝ちゃいましょう。

三人、再び横になる。

女 ほんとほはさ…死にたくないのかな。

男1 え？

女 体はき、食べたがつてるじゃん。お肉。

男2 うん。

女 …お金がいっぱいあれば、お肉も好きなだけ食べられて。

男1・2 …。

女 あたしも死ななくて済む。

男1・2 …。

女 寝よ。(おなかを抱えるようにして寝返りを打つ)

男1 ミルクガールさんは。

女 うん？

男1 お金のために死んでいくんですね

女 そうよ。

男1 …。

女 バカバカしいね。

男1 …いや。

女 ホントはお肉が食べただけなのにね。

男1 ええ。

男2 ミルクガールさんはさあ。

女 はい。

男2 …お金が好きなの？お金と交換で手に入る物が好きなの？

女 うーん…どっちともいえない。お金使うこと自体好きだから。

男2 でもさ、結局、そのせいで苦しんでるじゃない。

女 …そうね。

男1 …どっち取ります？

女 え？

男1 現金3万円と、同じ価値のお肉500グラム。

女 …難しいわね。

男1 今、取るとしたら。

女 肉。

男2 じゃあ、肉のほうが好きなんじゃん。

女 だって、死ぬ前だもん。お金なんていくら持ってたって…。

男2 案外とさあ…。

女 うん。

男2 お金のない世の中のが幸せになれたりしてね。ミルクガールさんは。
女 えー。
男1 原始時代とかね。
女 うーん。
男2 で、肉が食べられればいいんでしょう？
女 肉はね。外せないわね。
男1 僕、あれ食べたいなあ。
女 うん？
男1 肉。骨のついたやつ。ムカシ人間に出てきたやつ。
男2 ああ、マンモスの肉？
女 それ！食べたい。
男1 あれが毎日食えたらお金なんか要らないよね。
女 あはは。
男2 いいね。
男1 ああ…肉。
三人 肉…肉…肉…肉…肉…肉…。

三人、そのまま拍子をとって起き上がる。
舞台は原始時代に。男2と女、何かをムシヤムシヤ食べている。

男2 マンゴー、グレープフルーツ。

女 キウイ、パイヤ。

男2 マンゴー。

女 桃、栗。

男2 マンゴー。

女 マンゴー。

男2 ……マンゴー。

女 マンゴー！

男2 おなかいっぱい。

女 満足。

二人、笑う。するとそこに、巨大な肉を引きずった男1が帰ってくる。(キン肉マンのテーマかなんかを歌って出てきてもいいかもね)

男1 うはは、ボンジュール。

男1 よそ者！

女 よそ者！

男1 ボンジュール！

女 知らない言葉！

男2 見知らぬ土地の言葉！

女 よそ者出て行く！

男1 そんなこと言わない。ミーは取引したいだけ。

男2 取引？

男1 ユー達の持つてる豊富なフルーツと、ミー達の飼っている家畜の肉を交換したいのデス！

男2 肉？

女 肉って何だ？

男1 とつても美味しいモノなのデス！

男2 肉…。

女 うまい…。

男1 百聞は一見にしかずと申しマス。

男2 百聞…？

女 一見？

男1 遠い国のことわざデス！とにかく一口、トライしてみるべきデス。

男2 お前、食え。

女 お前こそ、食え。

男1 レッツ、トライ！

男2と女、おつかかなびつくり肉を口に入れる。

男2 うまい！

女 うまい！

男1 でしょう。

男2 これ、くれ。

女 うんうん。
男1 じゃあ、フルーツをプリーズ。
男2 あげる。ほら、マンゴー。
女 柿、目にいいブルーベリー。
男2 ゆず。
女 抗酸化作用のあるアボガド。
男2 ノニジュース。
女 ミックスナッツ。
男2 マンゴー。
女 マンゴー。
男2 マンゴー。
女 ドライマンゴー。
男1 ちよつとマンゴー比率が高いような気がします、良しとしましょウ。
女 ちよつとした乾きモノも入れておいた。
男1 メルシー、ボーケー。では、また定期的によつてきます。
男2 大歓迎。

女　　また来て。

男1　アデュー。

男1、舞台の隅に退却。

男2　肉。(食べる)

女　肉。(食べる)

男2・女　おいしい。

男2　豊富な肉。

女　肉。

男2・女　うまい。

男2　…もうない。

女　うん…ない。

男2　仕方ない。フルーツ食べる。

女　うん。

二人、フルーツをむさぼる。

男2 …。

女 なんかねえ…こう。

男2 おいしいんだけどねえ。

女 モノ足りないつつうの？

男2 満足できない。

女 できない。

男2 はやく、あのフランス人来ないかな。

女 でも、最近、あいつ来なくなつた。

男2 うん…どうしたんだろう。

男1 ひい…ひい…。(体を引きずるようにして登場)

女 あ！フランス人！

男2 肉！

男1 オー！フルーツ族の皆さん！助けて下さい！

男2 どうした！

男1 我がフランス族の村に、おいしい肉を求めてほかの部族が攻めてきたのデス！

男2 なに！

男1 ミーは命からがら逃げてきまシタ。

女 じゃあ、肉は？

男1 そんなもん、持って来てるワケないでシヨウ。

男2 なんだ…。

女 じゃあ、用ない。

男2 帰れ。

男1 いいんデスカ…そんなこと言つて。

女 …？

男1 攻めてきたアングロ・サクソン族はとつても肉食です。彼らに家畜を取られたら、はっ

きり言つてあなた方に回つてくるお肉はゼロデス。

男2 肉…食えなくなるのか。

女 やだ。

男1 でしょう…じゃあ、我がフランス族と一緒に戦つて下サイ。

男2 え…でも、オレけんか弱い。

女 ダメ！お肉食べたい！戦う！

男2 ズルい。お前戦わないのに。

女 お前戦わないなら、ワタシお前の子供生んであげない。夜の生活もナシ。

男2 …仕方ない。戦う。

男1 それでこそ真のオトコデス！

男2 ただし、勝ったら肉くれ。

男1 当然です。最高級のマツザカ牛をあげます！

男2 よし、やる気出た！

女 ガンバレ！

男1 うん…あ、アレは！

男2 あいつらか！

男1 そうデス！凶暴極まりないアングロ・サクソン族デス！

男2 よーし、かかれ！

男1・2、喚声を挙げながら、壁に向かって襲いかかる。そして、ヘトヘトになって戻ってくる。

女 どうだった？

男2 ボロ負け…。

男1 ああ…やっぱり肉食ってるやつらは強いわ…。

女 じゃあ、肉は？

男1 肉どころか明日食べるモノもありません。

男2 フルーツも取られちまったからな。

女 どうする！明日からどうやって生活する！

男2 生活！？知るか！お前が戦えつて言ったくせに！

女 あー！肉！肉が食べたい！

男2 フルーツも食べたい。

男1 …無念デス。

女 もとはといえ、こいつ悪い。(男1を指さす)

男1 え？

男2 そうだ。お前が俺たちを巻き込んだ。

男1 …そんな！

男2 責任とる。

男1 責任って…。

女 こいつ、食う。

男1 え！

男2 おお、グッドアイデア。

女 よく考えたら、こいつも肉。

男2 肉！

男1 や、やめなさい！野蛮デス！

女 大人しくする。

男2 肉！

男2、男1を押さえつける。女、男1のふくらはぎに噛み付く。

女 うま…うまい。

男1 ギャー！

男2 たんぽさん、大丈夫か！ちよ…やめろ！ミルクさん！

女 …は！（男1のふくらはぎを放す）

男1 痛う…。

女 肉…。

男2 肉？

女 今、ここに大きな肉が…。

男2 寝ぼけてんのか？

男1 勘弁してくださいよ。思いつきり噛んだでしょ。

女 うん、固くてマズい肉だった。

男2 こりやダメだ。人間が肉に見えるんじや。

男1 相当、腹減ってますね。

女 あ、たんぼさん。

男1 おはようございます。目は覚めましたか。

女 肉は？

男1 ここです。(ふくらはぎを指差す)

女 え！ウソ！どうしたの？痛そう。

男1 あんたに食われそうになったんだよ。

男2 …幻覚かもな。

女 幻覚？

男2 うん。窒息状態に陥ると見ることもあるらしいよ。

女 へえ…。

男1 ああ、聞いたことがあります。炭鉱で火災なんかがあるとね。煙にまかれて幻覚を見る炭鉱夫なんかが実際にいたらしいですから。

女 あたし窒息してるの？

男2 うーん、わかんないけど、だいぶ炭も不完全燃焼してるみたいだしね。クソ暑いし。

男1 普通の状態じゃありませんね。

女 おなか減ってるしね。

男2 …うん。

男1 変な夢見ても不思議じゃありませんよ。

女 あー、でもやっぱ最初に見た夢が良かったなあ。

男1 ああ、お金持ちのやつ？

女 そう。暑くもなく、寒くもなく、将来の不安もない。

男2 食べ物にも不自由しないし。

女 ねえ、最後はあの夢で死のうよ。

男1 そんなに都合良く、見たい夢が見られるといいですけどね。

男2 ああ、そうしたら一生夢の中にいるね。

女 枕の下にさあ、見たい夢を書いたメモを入れると、見たい夢を見られるらしいよ。

男1 ああ、聞いたことありますね。

男2 やつてみる？

女 うん。

男2 書くものありますか？

男1 ああ、黒しかないですけど。(胸ポケットを探る仕草)

男2 上等上等。

女 メモは？

男2 楽譜でいい？

女 上等上等。

全員にメモが行き渡る。ペンは回す仕草。

女 枕は？

男1 ないですよ。

男2 しょうがないじゃん。直接頭の下に敷けばいいよ。

女 うーん、気分出ないなあ。

男1 まあ、いいじゃないですか。

男2 とにかく試してみよう。

女 ……はあい。

三人、頭の下にメモを敷いて横になる。

女 ねえ。あのさ。

男2 うん？

女 夢、なんて書いたの？

男2 秘密。

女 やっぱ、お金持ちの夢？

男2 違うよ。

女 えー、協調性ない。

男2　なんで死ぬ間際の夢まで指定されなきゃなんないんだよ。

女　たんぼさんは？

男1　死に別れた彼女とね…また、会えますように…みたいな。

女　ふーん、いいわね。生臭くなくて。

男2　今度はみんな別々の夢にしようよ。

男1　そうですね。

女　…おやすみ。

男1・2　おやすみい。

しばらくの沈黙。すると、男1と男2は互いににじり寄る。そして、アクロバティックにまぐわう。

男2　あー、ミルクう。

男1　そんな…ミルク…うつ。

すると、「おはよー」と言いながら、女が登場する。

男1 え？

男2 は！

男1と2、誰とまぐわっていたのかお互いに気がつき、驚いて身を離す。

男2 お、お、お、お……おはよう。

男1 ああ……は、早いね。

女 うん、先にシャワー浴びちゃった。

男1 あれ……昨日は……。

女 やだ……覚えてないの？

男1 あ……うん。

女 結局三人で、ここで飲むことになったんじゃない。

男1 ああ……そうだったけ。

女 でも、確かにラウンジじゃなくて正解だったかも。さすが最上階だわ。イイ眺め！ね。
(男2に)。

男2 ああ…うん。

女 さて、今日はヨットで沖まで行くんだっけ？

男1・2 ええ。

女 何、イヤなの？

男2 いや、飲みすぎで気持ち悪いんだよ。

女 ええ。

男1 もう、沖にいるみたいだもん。

男1、少し口を押さえて吐きそうになる。

男2 おい、大丈夫か。

男1 平気、平気。

女 ヨットは？

男2 無理だよ。

男1 向かい酒…ちようだい。

男2 それで、おさまるのか？

男1 大概…。

男2、男1に酒を与える。少し口をつける男1。

男1 …ふう。

男2 ちよつと、俺ももらおうかな。

女 ヨットは？

男2 無理だつて言つてんだろ。それよりカーテン引いて。まぶしい。

女 えー、せつかく絶景なのに。

男2 仕方ねえだろ。たんぽ気持ちわりいんだから。

女 飲みすぎるのが悪いんだよ。

男2 男には飲みたい夜もあるんだよ。な。

男1 …はは。

男2 俺にだつて…あつたじゃん。

女 うん？…あ、アレ？

男2 そう、アレ。

女と男2、目を見合わせて笑う。

男1 やめてよ、そういうの。

男2 へ？

男1 キズつくじゃない。(笑う)

男2 ああ：そっか。たんぼにとっちゃ昨日は生涯初の失恋だったよな。

男1 二人だけの秘密か。：はは、見せつけるねえ。

男2 別に秘密じゃ…。

女 サザンよ。

男1 サザン？

女 行けなかったのよ、梵ちゃん。サザンのコンサート。あたしにフラれたショックで。

男1 フラれた？だつて…。

男2 一回、フラれてるんだよ。

女 あんまり打ちひしがれてるからさ、一緒に飲んであげたのよ。そしたらこの人、へべレケに酔っちゃつて。

男2 二日酔いで行けなくなっちゃったんだよ。サザンのコンサート。

男1 へえ、そうか…すんなり付き合ったワケじゃないんだな。

男2 へ…まあ、そういうこと。

女 残念だったね。サザン好きだったのに。

男2 いや、後悔はない。その先があるからね。

男1 その先？

女 ちよつと…やめてよ。

男2 正確には、行けなかったんじゃないかって、行かなかったんだ。コンサート。

男1 ほう。

男2 明け方まで飲んでさ、ミルクの車で下宿まで送ってもらったんだ。こいつ、車持ってやがったからさ。

女 あの時はあたしの方がお金持ちだったからね。

男2 でも、高速降りたところで気持ち悪くなつてさ…。しょうがないからホテルに…。

男1 またホテルか。

女 いえ、でも何かしようとか、そういうの全然なかったの。本当に気持ちが悪そうだったから。

男1　そこで、もう一回口説いたんだな。

男2　さすが、何でわかるの？

男1　わかるよ、そんなの。

女　あんな苦しそうな状態で求愛されたらさ、なんか健気に見えてきちゃって。

男1　母性本能をくすぐられたわけだな。

女　そうかも。

男2　で、まあ、結局昼過ぎには回復してさ、帰ろうと思えば帰れたんだけどね。

男1　やつちやつたわけだ。

男2　やつちやつたわけよ。

女　もう、やだあ。

男2　かれこれ、夕方まで楽しんでさ、それでも車飛ばせば間に合ったんだけどね。コンサー
ト。

女　もうなんかダルいじゃん。

男2　そうそう。

女　…って言うってたね。

男2 そりゃね。前日から寝てなくて、二日酔いで、夕方までヤッて、それからコンサート？

無理だつて。

女 でも、ちよつともつたいなかったじゃん。チケット。S席でしょ？

男2 ああ、三枚無駄にしたよ。

女 三枚？

男2 うん。ミルクの分と、俺の分と、あと…。

男1 俺の分な。

男2 あ…あれ。たんぼだったっけ。

女 三人で行く予定だったの？

男2 気…気まずかったんだ。二人つきりつていうのはさ。

男1 俺も気まずかったぞ。好きでもないサザンのコンサートを最前列で。

男2 …。

男1 …女も連れず。

男2 …。

男1 しょうがないから踊ったぞ…最前列で。

女 何で？

男1 目立つんだよ。男一人で腕組んで突っ立っていると。回りは全部踊ってるからな、最前列は。

男2 …ごめん。

男1 恨んだぞ。あんなイイ席取りやがって。

男2 でもさ…やっぱ無理だったんだ、あの日は。精も根も尽き果てちまつてさ。

男1 ケータイ電話もない時代に…。俺は込み合う入場ゲートで直前まで待つて…。

男2 …。

男1 あの日、風邪引いたつて…言つてたよな。

男2 …ゴメン。

男1 信じたぞ。

男2 …。

男1 俺が桑田圭介に水をかけられて必死に踊っているときに、お前は高速出口のお城みたいなホテルで、女の髪をなでながら、ああ、だりいとか言つて…。

男2 だから…ごめん。

男1 ゴメンで済むか！

女 帰ればよかったじゃん。

男1 え？

女 そんなにイヤなら…帰ればよかったじゃん。

男1 …それは、君が…。

女 うん？

男1 来るかもしれないと…思っていたから。

女 …ああ。

男2 何だ…。

男1 あ？

男2 結局、お前も女が目当てだったんじゃないか。

男1 何！俺はお前とミルクの間を取り持つてやろうとして…。

男2 あぶねえ、あぶねえ…危うく横から女、さらわれるところだったぜ。

男1 本気で言ってるのか。

男2 お前がミルクに惚れてたのは知ってたからな。

男1 ダチの女にまで手え出すかよ。

男2・女 出してた。

男1 そ、そうだった。

男2 俺は内心、お前を眠れる獅子と呼んで恐れていた。サークル中の女を片っ端から食っ

てるお前に内心ヒヤヒヤだったんだ。

男1 …。

男2 何でミルクにだけは手を出さなかったんだろう？ずっと不思議だった。

男1 それは…。

男2 何のことはない。お前はミルクに手を出そうとしていたんだ。予想外に俺の行動が早かったんでタイミングを失っただけだ。

男1 ちが…。

男2 何が違うんだ、このスケベ野郎！

男1 テメエ、いい加減にしろ！

男2 何だ、やんのか！

男1 上等だ！

女 ちよつと、やめなさいよ二十年も前の話で。

男2 女は黙つてろ！

男1 そうだ！男にはやらなきゃならないときがあるんだ。

男2 …覚悟はいいか。

男1 こっちのセリフだけ。

男1・2 …どりやあ！

男1・2、お互いに殴りかかる。しかし、非常に無様な戦いぶり。

男1 はあ、はあ、はあ…。

男2 はあ、はあ、はあ…。

男1 へ…キク…梵ちゃんのパンチ、重すぎるんだよ。

男2 たんぼのローキックも効いたぜ。

男1・2 あははははは！

女 ひよつとして…一人ともケンカ弱いのか？

男1・2 うん。

女 なんだ…つまんない。

男2 …え？

女 ケンカしてよ。

男1 …は？

女 あたしを奪い合つてよ。

男1 いやあ、梵ちゃんの必死さでわかったよ。本当にミルクに相応しいのは梵ちゃんさ。

男2 いや、運が良かっただけでさ……。ちよつとタイミングがズレてたら、ミルクを落とすのはたんぽだったかもな。

女 気持ち悪いなあ、誉め合つちゃつて。

男1 だつてなあ、一度、拳を交えた男と男はな。

男2 わかり合うんだよな。

男1・2 あはははははは。

女 ねえ、ケンカして！勝つたほうと、あたし、付き合おう。

男1 いやいや、君は梵ちゃんとお似合いだ。外資系だし、確定申告だし、何より君を愛している。

男2 いやいや、女を扱いなれてるたんぽの方が、ミルクを幸せにできるかもしれない。トレ―ダーで、東証一部上場で、なによりミルクを愛している。

女 譲り合わないでよ！私はね、常に物語の主人公でありたいの！二人とも、あたしを奪い合つて！より「あたしの物語」を盛り上げてくれた男のものに、あたし、なるわ！

男1 じゃあ、俺、今劇的に負けるわ。外資系と金と愛につつまれて、その後お姫様は幸せに暮らすだろう。

男2 待った。俺が負けるよ。マザース一部上場と金と愛につつまれて、よりスリリングな日常を、姫は送るはずだから。

女 あたし、本当は名誉も金も愛も要らないの。そんなものはあたしの人生を演出する道具立てに過ぎないんだから。

男1・2 じゃあ、どうして欲しいの。

女 相手にして欲しいのよ！退屈が怖いよ！取るに足りない自分が、取るに足りない人生を生きて、老いさらばえていく！怖い！

男2 だから、お金を使ったの？

男1 借金してまで？

女 ……そう…。

男2 だから、デザイナーなんだ。

女 ……うん。

男1 だから…CR北斗の拳なんだね。

女 ……そう。

男2 …辛いね。

女 …はい。

男1 地獄だ。

女 …。

男1 汲めども汲めども尽きない、自意識の地獄だ。

女 …。

男2 …君次第だよ。

女 …。

男1 …この地獄を捨てて、旦那さんと娘さんと…暮らした方がいいんじゃない？

女 …そうかな。

男2 …ここはいい所だからね。別に居ついたつていいんだけどさ。

男1 …なるべく、帰ったほうがいいと思うよ。

女 …そうかな。

男1 うん。

男2 …ちなみに…。

女 …はい。

男2 君は取るに足らない存在じゃあないぜ。

女 え…だつて。

男2 だつて、俺なんか…君の歌を作っちゃったんだから。

男2・1、女の自意識を満足させる歌を歌う。生まれてきたこと自体が存在の価値だといった内容を、皮肉を交えて表現したいね。女、ヘッドバンキングで踊る。失神して倒れる。

女、ゆつくりと目を覚ます。

女 おはよう。

男2 ああ、起こしちゃった？

女 ううん…。(首を振る)

男1 ちよつと、うなされてましたけど…。

女 いえ…いい夢だったわ。

男2 じゃあ、お金持ちになれたんだ。夢の中で。

女 うん…でも、それでいい夢ってワケじゃないんだけどさ。

男2 へえ。

男1 …しかし。

男2 うん？

男1 死にませんね。

男2 ちよつと、目張り甘いのかな。やつぱり。

男1 そうですよ。チェックしましょう。チェック。

女 やめようかな…。

男1 は？

女 死ぬの…やめようかな。

男2 今さら何言ってるのさ。

女 …だつて。

男1 今やめたら、全部やり直しですよ。目貼りやつて、火を起こして…。

女 何だか自信が出てきちゃったのよ…もう、お金がなくても…やっついていけるかも。

男2 肉があればつてこと？

女 肉もいらぬ。

男2 どうしちやったの？

女 心境の変化かしら…ただ生きてるだけでもいいかなつて。

男2 …また、同じ道に帰っていくのがオチだよ。

女 …うーん。

男2 借金して、パチンコして…もう病気なんだから。ね。(男1に)

男1 え…あ、いや…。

男2 心を入れ替えたつもりになったって…必ず物足りなくなる。不治の病だ。

女 …そうかなあ。

男2 ミルクガールさんは賢いよ。その先の地獄を読んで…先手を打った。

女 死ぬってこと？

男2 そうそう。死の苦しみを味わう前に、死を選んだんだ。

女 でも…。

男2 はい？

女 あたし…帰る。

女、立ち上がる。慌てる男1・2。

男2 え、待つてよ。

女 お金のために死ぬなんて…バカバカしい。

男2 そんな…。

女 私の価値を認めてくれる誰かのためになら…。

男2 …。

女 死んでもいいわ。

男2 じゃあ、僕のために死んでくれ。

女 は？

男2 僕の死に花を添えてください。

女 何言ってるの。

男2 こんな冴えないオッサンと二人で死ねって言うのか。

男1 な…。

女 そんなのあなたの勝手でしょう。

男2 頼む。

女 …。

男2 それは僕にとって、とても価値のあることなんだ。

女 あんたさあ…。

男2 はい。

女 ウソだね。この世に執着できないなんて。

男2 ……そうだね。

女 ……。

男2 女と死にたい。(ニコリと笑う)

女 ……。

男2 あなたが必要だ。

女 ……。

男2 ……。

女 本気？

男2 それが、あなたの価値だ。

女 ……。

男2 ……。

女 いいよ。(ニコリと笑う)

女、元の位置に座る。

男1 良かった。

男2 え。

男1 これで最初からやり直さなくて済む。

男2 …まあね。

男1 ちよつとヒヤヒヤしましたよ。

女 たんぼさんつてさあ。

男1 はい。

女 どっか欠落してるよね。

男1 そうですか？

女 あの生きるか死ぬかのやり取りを聞いても、そんな事しか考えられないの？

男1 だって、僕と関わり合いがないじゃないですか。

女 …よく好きになつてくれる女がいたよね。

男1 金銭感覚欠落してる人に言われたくないなあ。

男2 そういえば、たんぼさんはさあ。

男1 はい。

男2 何でたんぼさんなの？

男1 ああ、ハンドルネーム。

男2 うん。

男1 中小企業対象の融資を担当してた時代がありましたね。市役所で。

女 ユウシ？

男1 ああ、お金貸してたんですよ。中小企業に。

女 へえ、貸してくれるんだ。お金。

男1 中小企業にね…。で、電話口で担保の説明をしてたらしいの間にか…。

男2 たんぼさんって呼ばれるようになったんだ。

男1 ええ、よっぽど担保担保って言うてたんですかね。自分じゃわからないですけど。

女 だから、異常に几帳面なんだね。

男1 ええ、せちがらいですよ。実際。

女 ああ…：なんか嫌だね。お金とか。

男2 ずいぶん変わったね。意見。

女 お金でも食料とかでも同じなんだけどさ、なんか労働やなんかと交換で手に入るものじゃない。

男1 そりやそうですよ。

女 ムシのいい話かも知んないけどさ、次に生まれてくるときはそういう苦労のない世界に生まれてきたいよね。

男2 ああ、いいね。

女 ほら、さっきの死んだ人が行くお花畑みたいなさ。

男1 ああ。

女 そこにはサンサンと太陽が降り注ぎ、食べ物の心配も、お金の心配も存在しない。ガーベラとポピーの花が静かに揺れているだけ。

男2 いいね。

女 私はそこに飛んでいる一匹のモンシロチョウ。

男2 ああ…じゃあ、僕は遊び暮らすだけのキリギリスになるよ。

男1 じゃあ…じゃあ、僕もチョウチョがいい。

女 メモちようだい。

男2 は？またやんの？

女 どうせなら、いい夢見て死にましよう。

男2 そんなこと言つて、さつきからいつこうに死なないじゃない。

女 次こそ死ぬわよ。

男2 はいはい。

三人、またメモを書く。頭の下に敷く。

三人 おやすみい。

男2、ギターをかき鳴らす。男2はキリギリスに、女はモンシロチョウになっている。男1はイモムシになっている。それぞれ、リズムに乗って自己紹介。

男1 うう…僕が希望したのは次の段階なのに…。

男2 やあ、イモムシ君。

男1 あ、キリギリスさん。

男2 今日も醜いね。

男1 好きで醜いわけではありません。生まれつきこうなんです。

男2 やあ、まあクヨクヨしても始まらないから。唄うしかないね。ラララ…。

男1 ラララ…。

女 あら、醜いイモムシさん。ごきげんよう。

男1 あ、これはモンシロチョウさん。

女 相変わらず鈍重なこと。

男1 ひどいなあ。

女 そうかしら。

男1 あなただつて、昔はイモムシだったじゃないですか。

女 私はあなたみたいに、大きくて気味悪くなかったもの。

男1 それは…そうですが。

女 あなたはきつと蛾になるのね。

男1 蛾！

男2 蛾！ラララ…。

女 で、焚き火を太陽だと勘違いして、飛び込んで焼け死ぬんだわ。

男1 そうなのかなあ…。

女 それが醜く生まれたものの定めなのよ。そして私は白くてカワイイ、モンシロチョウ。

男2 モンシロチョウ！ラララ…。

男1 ああ、僕もモンシロチョウが良かった…。

女 元氣をお出しなさい。ここはあなたが食べる葉っぱもいっぱいあるし。あたしが飲む蜜もある。醜くても生きていけるわ。

男2 素晴らしいお花畑！（ギターをかき鳴らす）

女 あとは、馬鹿な鳥にでも食べられないように気をつけていれば、楽しんで長生きできるわ。

男2 大丈夫さ、やつら毒がありそうな虫は食わないから。

女 じゃあ、イモムシさんは大丈夫ね。

男2 うらやましいなあ。

男2・女 あははははははは。

女 今日はね、キリギリスさん。

男2 何だい？モンシロチョウさん。

女 あたし、お弁当を作ってきたの。

男2 そいつはいいね。

女 キリギリスさんのために、キャベツの新芽を摘んできたのよ。

男2 やあ、こいつはご馳走だ。

女 ほら、チーズと生ハムをくるんであるのよ。

男2 イタリアンだね。

女 はい、あーん。

男2 あーん。

男1 僕にも下さい。

女 寄るなイモムシ！（男1を足蹴にする）

男1 げへえ！

女 テメエがキャベツの新芽を食おうなんて百億万年早ええんだよ。テメエはなあ…汚ねえイモムシはなあ、そのどことも知れない野草、とりわけドクダミ草をなあ…利尿作用のあるドクダミ草を煎して飲んでろ！そうすりゃ死なねえ！生まれつき高貴な我々の食材には決して手を出すなよ！この賤しいイモムシめが！

男2 まあまあ、ここはモンシロチョウさん。

女 あら、これはキリギリスさん。

男2 そのようなものにお御足を乗せていますと、お靴が穢れますよ。

女 優しいわ、キリギリスさんは。ジエントル虫ね。

男2 いやあ。

女 ほら、どけ。(男1を蹴る)

男1 らべ！内臓があ。(内臓が出てくるジエスチャー)

女 キリギリスさん。あたしね、キリギリスさんと結婚したいわ。

男2 え！

女 でね、子供をいっぱい産むのよ。

男2 それはちよつと…。

女 え…。

男2 君と僕の子供では、きつと世にも不思議な生き物が生まれてしまうよ。

女 大丈夫よ！私、モンシロチョウとして育てるから！

男2 無理だよ。あの醜いバケモノを見てごらん。(男1を指差す)

女 …。

男2 あの赤黒い内臓を飛び出させて、敵を威嚇するイモムシを。

女 …うん。

男2 醜く生まれたものの末期まは悲惨だよ。モンシロチョウさん。

女 …。

男2 残念だけど、僕と君とでは遺伝子が違いすぎるんだ。

女 愛は遺伝子だって越えるのよ！

男2 無理だ。モンシロキリギリスが生まれてしまうよ。

女 聞いたことわ！そんな生き物。

男2 だろ…僕もない。

女 ああ…悲恋だわ。愛してるのに遺伝子によって引き裂かれるのね。(泣き崩れる)

男2 ああ、泣かないで！モンシロチョウさん…そうだ、歌を歌ってあげよう。

女 歌？

男2 そうさ、歌は遺伝子も越えるのさ！

男2と女、「美しく生まれた二人は結ばれなかったけど、美しく生まれてきてよかったね」といった内容の高慢な歌を歌う。

すると、男1に変化が現れる。脈打ち、のたうち始める。

男2 な…なに？

女 どうしたの？

男2 イモムシさんが…何か、変だ。

男1 ブシュー。(糸を吐く)

男2 ぐわあ、糸だ！

女 これは…！

男2 し、知ってるの？モンシロチョウさん。

女 メタモルフオーゼ！

男2 メタモルフオーゼ？

女 私も蝶になるときに経験したわ。これからイモムシさんは…。

男2 蝶になるのかい？

女 わからないわ。…蛾になるかも。

男1 ぬがあああ！（立ち上がる）

女 さなぎよ！

男2 さなぎ…。

女 この状態を過ぎると…イモムシさんは…。

男2、ギター演奏開始。

男1 ドツクン…ドツクン…ドツクン…。

女 来るわ！

男1、殻を破り羽根を広げる。男2、ギターをいつそう激しく。

男1 はははははは！我が名はミカドアゲハ！クイーン・オブ・バタフライ！そのモンシロチョ

ウ、ひれ伏しなさい。

女 ミカドアゲハ！？

男2 うつくしい！

男1 そう、私は美しい！

女 ええい！ついさっきまでイモムシだったくせに、ナマイキな！

女、男1に襲い掛かる。男1、羽根の一閃で払いのける。

女 きゃあ！

男1 笑止。モンシロチョウの分際で。(女に片足をかけて見下す)
女 た…たすけて。
男1 ふははははは！この勢いで全お花畑を支配してくれるわ！
女 く、苦しい。
男1 ミカドアゲハにあらずんば蝶にあらず！
女 うげえええ！
男1 この世をば、わが世とぞ思ふ望月の、欠けたることのなしと思へば！女王様とお呼
び！
女 女王様あ！
男1 そう！私はミカドアゲハ！
女 女王様あ！
男1 私はあ！ミカドアゲハあ！！
男2 あ、鳥。
男1 え…キヤー。(鳥にさらわれる)
女 …。
男1 やだ…生まれたばかりなのに…やだー！

男2、レクイエム演奏。

男1 露と落ち、露と消えにし我が身かな、なにはのことも夢のまた夢え！ぎやー！

男1、のたうちまわる。

男2 たんぼ、たんぼ…。

男1 え…あ…？

男2 大丈夫か？

女 船酔い？

男1 わ、私は…。

男2 いったん戻ろうか。

女 えー、やだ。せつかく沖まで来たのに。

男2 仕方がないだろ。たんぼ具合が悪いんだから。

男1 …梵ちゃん…あれ？

男2 やっぱ無理だったんだよ。今朝、あんな二日酔いでさ、ヨットなんて。
女 暴れたらすつきりしたって言ってたじゃん。
男1 あー…大丈夫だよ。ちよつと悪い夢見ただけだから。
男2 …無理すんな。
女 暑いからねえ。こんなところで寝たらさ、悪い夢も見るよ。
男2 キヤビンに入ってたほうが…。
男1 表のほうが…気分がいい。
男2 …そうか。
女 ちよつと波が高いね。
男2 普通じゃない？
女 そう？昔来た時はこんなに…。
男2 ああ、あの時はベタ風だったからね。
女 そうなんだ。
男2 よし、メシ食おうか。
女 え、ご飯食べるの？
男2 そうだよ。たんぽ食える？

男1 うん…逆にちよつと入れたい。

男2 そうか。じゃあ、その鍋とつて。

男1 はいよ。

男2 ミルク、そこにカレーあるからとつて。

女 カレー？

男2 そうだよ。

女 金持ちがカレー？

男2 海の上じゃそんなもんだよ。そのの、アイスボックスに入ってるから。サトウのご飯も持つて来て。

女 あれ、電子レンジじゃないの？

男2 大丈夫だろ。湯煎でも。

女 何かテキトーだね。

男2 いきなり行くことになったから、何にも準備してこなかったんだよ。

女 えー。

男2 文句あるなら食わなくてもいいぜ。

女 はいはい。

男2 あとはカセットコンロ…。

三人、舞台の中央で煮炊きを始める。

男1 これ…梵ちゃんのヨットか？

男2 そうだよ。

男1 すげえじゃん。

男2 欲しかったらたんぼだつて持てるだろ。

男1 いやあ、このヨット維持してさ、海まで出ようつていうヤル気がさ…すげえよ。

男2 別にねえよ、ヤル気なんて。むしろ、その逆でさ…。

男1 逆…？

女 女だけじゃないんだよ。奥手なのは。

男2 …。

女 万事ヤル気になれないんだ。正直なところ。

男1 なにそれ？

女 昔、言つてたんだ。この人が…ちやうどヨットの上で。

男1 ふーん、そんな風には見えないけどね。…狙った女はモノにする。仕事すれば優秀。趣味はヨット。

男2 ああ…。

男1 ヤル気のない人間にはちよつと無理だぜ。

男2 え…いや、狙った女たつてミルクだけだし…それに…。

女 あたしは特別なんでしょ？梵ちゃん。

男2 うん…現実感がなかったんだ。妙に。

女 …ひどいでしょ。ホント。(男1に)

男2 何か…もう、人間離れた…作り物みたいな…。

女 お人形さんみたいにカワイイってことかしら。

男2 そうじゃない。

女 ひどいわ。

男1 まあ、彼女にだけは情熱が持てたわけだ。

男2 …そうだね。

男1 仕事や趣味は？

女 この人はね…人間が嫌いなよ。

男1 へえ、社会的に見えるけどね。

男2 そりゃ、仕事上必要な人には愛想よくするよ。ただ…仕事は…没入しただけ。

男1 没入？

男2 楽だったんだ。外資系はドライだからさ。個人的な人付き合いを避けられた。仕事
ができりゃ文句は言われないんだよ。だから、結果を出してきた。動かしようのない結
果をね。ヨットは…。

女 海に出れば、一人になれるからでしょ。

男2 ああ…そうそう。

女 私ならゾツとしないけど…こんな広い海の上で一人だけなんて。

男1 そういえば…。

男2 うん？

男1 大学時代、僕としかつるまなかつたよな。梵ちゃん。

男2 ああ…。

男1 僕も現実感がなかったのか？

男2 うーん…よく分からないんだけど、好感が持ってたんだよな。

男1 好感？

男2 人間関係をモノともしないで、次々と女を使い捨てていく、あの軽快さが。

男1 あのー…。

男2 はい？

男1 だから…そんなに私遊んでましたっけ？

男2・女 遊んでた。

男1 うーん。

男2 さ、出来たぜ。

全員、食事を始める。

男2 だからさ…本当に世界がたんぼとミルクだけで完結してればいいのにつて…思ったよ。

女 大学生の頃？

男2 そうそう。

ここで男2、ギターを弾き始める。

男2 明日から仕事か…嫌だね。

女 バリバリのサラリーマンが何言ってるんだか。

男2 死んでしまおうかな。

女 やめてよ。

男2 ずっと思ってたんだ。この世の中にいる人間の群れを全滅させたら、僕自身どんなにかサッパリするだろうって。

女 全滅？

男2 うん。

女 ご勝手な理屈ですこと。

男2 分かってるよ。

女 あのね、この世に人間がいなくなったら、誰があたしのデザインを買ってくれるのよ。

男2 ご迷惑ですよね。

女 当然。

男2 だからさ、思いついたわけね。僕がいなくなれば、人間もいなくなるんだ。

女 …？

「っ」で、男1、いびきをかき始める。

男2 …薬、効いたのかな。

女 え…。

男2 カレーつて味が濃いからね。ちよつと薬混ぜても分からないんだよ。

女 何言つてんの…。

男2 だからさ…考えたんだよね。人間なんかさ、結局、僕の頭の中にしかないんだよ。つまりさ…。

女 殺すの…。

男2 いや…どうしようかなつて。

女 やめて…。

男2 いや、だからさ…僕が居て、僕が感じてるから人間が居るんだ。僕が死んでしまえば、人間なんて居たのかどうかも分からない。ただ…。

女 ただ…？

男2 たんぼやミルクに対する…抑えがたい執着。

女 …執着？

男2 感情とか思い出とかね…。こいつが…僕をこの世界につなぎ止めているんだ。

女 いいじゃない、それ。普通だよ。

男2 そんなもんかな。

女 そうだよ。誰でも死にたいときなんかあるよ…だから…そういうのを心の支えに…。

男2 だからさ！

女 は…はい！

男2 そういう執着を断つてしまえば…僕は、僕も人間も全滅させることが出来る。

女 執着を断つて…あの。

男2 死んでももらえませんか？

女 嫌です。

男2 だよね。

女 残念だけど、みんなあんたの頭の外に住んでるのよ。あんたの機嫌で生かされたり殺

されたりしてたまりますか！

男2 …矛盾なんだよね。

女 はい？

男2 殺したくないんだよ、君たちを…。僕の頭の中に住んでいるだけの君たちに、僕の行

動は支配されている。

女 働きすぎよ。疲れてるのよ。お腹空いてるんじゃない？ほら…カレーを食べて。あ、確

かクレーラーボックスにビールが…。

男2 このカレーさ、たんぽに当たったんだね。(男1が食べかけのカレーを拾い上げる)

女 は？

男2 レトルト。パウチに1個だけ注射器で入れたんだ。薬。

女 …。

男2 僕が食べたら、僕しかヨット動かせないからさ…上手く遭難でもしてくれるかなって

…思ってた。ミルクが食べたら、たんぽに同じ話をするつもりだった。

女 …恐ろしいこと考えてるわね。

男2 死なせてください。

女 え。

男2 僕、これからこのカレー食べます。で、寝ます。

女 はい。

男2 寝たら、海に落としてくれ。

女 嫌よ。

男2 は？

女 私、殺人犯になっちゃうわ。

男2 黙つてりや分らないよ。

女 疑われるわよ。私のキャリアに傷がつくじゃない。それに…。

男2 え。

女 梵ちゃんが居なくなったら、誰がヨットを動かすのよ。

男2 ここ、まだ電波があるから携帯が使えるよ。救助に来てもらえば？無線もあるぜ。

女 もう、迷惑かかる死に方しないで！どつかで勝手に死んで！

男2 …。

男1 死んじやうの？

男2 え。

男1 人間は…梵さんの頭の中にしかないんでしょ？

男2 あ…うん。

男1 じゃあ、居させてやれば。

男2 居させてやるつて…。それよりお前…薬…効いてないのか。

女 嫌な目に、遭ったのかな？

男2 は？

男1 人間に、嫌な目に遭わされたんだろ？だから、人間なんか居なくなればいいと思ってるんだろ？

男2 そうなのかな…でも、いい思い出もあるんだぜ。たんぼやミルクや…。

男1 でも…人間に価値を感じない。

男2 そう…そうなんだ。

女 ホントはね、人間なんて居ないのよ。

男2 は？

男1 そこに、一匹一匹、生き物がいるだけだよ。

男2 それは理屈だ。

男1 じゃあ、自分の頭の中にしか人間が居ないってのも理屈じゃないのか？

女 それも手前勝手な。

男2 …。

男1 あのね…梵さんは…思ったほど人間と関係ない。

男2 関係…ない？

男1 人間は、君の頭の中に居るだけだ。

女 居るだけ。

男1 居させてやれ。

男2 …居るだけ。

男1 それから…。

男2 …なに。

男1・女 人間≠世界（人間イコール世界ではない）

男2 人間≠世界

男1 世界ごと人間を消してしまうのは、もったいないよ。

男2 …。

男1 世界が。

男2、ギターを奏でる。「人間≠世界」をテーマに三人は歌う。

男2を中心に、男1と女が向かい合っている。

男1　じゃあ、僕がポーランド人だということは、君のお父さんは知らないんだね。

女　知らないと思うわ。

男1　そうか…。

女　ねえ、考え過ぎじゃないの？

男1　いや…残念ながら、僕の中ではすでに確信に変わりつつある。

女　あなたが施設から引き取られたことが分かっただけでしょ？

男1　ああ…でもね、調べれば調べるほど、僕がポーランド人だという疑いは濃厚なんだよ。実際、施設で僕の友達だった連中は、みんなナチスがさらって来たポーランド人の子供だったんだ。

女　でも、あなたがそうだとはい限らないでしょ？

男1　何でうちにはキリル文字の落書きがあつちこつちにあるんだろう？

女　あなた以外の誰かが書いたのよ。

男1　誰がだい？僕の家族が？純粋なアーリア人であることが誇りの彼らが？わざわざ馬鹿にしているポーランド人の文字を使って落書きをするのかい？

女　それは…。

男1 それだけじゃない…子供の頃、僕の言葉に訛りがあつたとか、明らかに非ドイツ語で歌を歌っていたとか…そういえば、僕は食べ物の趣味がいかにポーランド的…。

女 やめて…疑いだしたらキリがないわ。

男1 それにね…それに、最近、夢を見るんだよ。

女 夢？

男1 殺すんだ。ポーランド人を次々と。

女 …。

男1 誰かが命令するんだよ。(男2、ヒトラー調に演説のマイム)この世の諸悪の根源であるポーランド人を抹殺しろつて。僕は首尾よく命令を遂行して、その誰かから表彰される。勲章ももらう。僕はますます張り切つて、ポーランド人を殺し続ける。…で、夢の最後に誰かがこう言うんだ。ついにポーランド人を全滅させる時が来た。最後のポーランド人は…。(男1、人差指をこめかみに押し当てる)

女 …そんな。

男1 僕は自決用のピストルをこめかみに当てて、勝利万歳と叫ぶ。引き金を引く…そこで、目が覚める。

女 …。

男1 別れよう。

女 …え。

男1 君のお父さんが、ポーランド人との結婚を許すわけがない。劣等人種との結婚を…。

女 昔の話じゃない。ナチスなんてもういないのよ。

男1 人間は、そう簡単には変わらないよ。僕が変わらないようにね。

女 …。

男1 君だつてポーランド人を馬鹿にしていたじゃないか。僕も馬鹿にしていた。今だつてしている。

女 …何かの間違いじゃないの？

男1 間違いなものか。ほら、今だつて聞こえる。ポーランド人を殺せ！（男2、演説）

男1、その場にうづくまる。

女 どうしたの！？

男1 触るな！

女 え。

男1 劣悪なポーランド人に触れてはならない。ドイツ人の純血が汚れてしまう。

女 やめて、あなたは何も劣ってなんかいないわよ。

男1 そうさ、そうとも、僕の何が劣っているっていうんだ、そこらのドイツ人なんかより、ずっと礼儀正しくて学問もある。

女 そうよ！あなたはドイツ人よ！

男1 いや…自分がポーランド人だと気づいて分かるよ。劣っている人種なんていない。汚くて小狡いこずるポーランド人は、僕の頭の中にしかないんだ。

女 あなたは…ドイツ人よ。

男1 違う！…頭の中のドイツ人が、ポーランド人の僕を殺せと言っている。死ね、死ね、僕。

女 駄目、駄目！

男1 ああ、ちきしょう！僕を殺して、僕の頭の中の汚いポーランド人も、汚い僕自身も全滅させてやる。ドイツ万歳！

女 やめて！

男1 ピストルを…自決用のピストルを。

女 やめて…。

男1 死なせてくれえ…。

女 だから、やめろつつてんだろ！

女、男2をはたく。男2、演説をやめる。

女 ダーリンが苦しんでるじゃない！

男2 だつて…。

女 あんたがドイツドイツつてうるさいから、ダーリンまで影響されてドイツマニアになつちやつたでしょ！

男2 しかし、私はドイツの栄光のため…。

女 何が栄光よ！人の彼氏をポーランド人呼ばわりしやがつて！失礼な！

男2 すいません。

女 なんならドイツ人を超えてしまえばいいわ。スーパードイツ人になればいいのよ！

男2 なにそれ…。

女 あんた達の腐った優越感を、同じく腐ったとうふようみたいにグズグズにぶつ潰して

やると言ってるのよ！ドイツ人を超えることによって！

男2 どうふよう…？

女 そうよ！とうふようよ！あんたの腐った頭に叩き込んでちょうだい。叩き込むべし！

男2 …。

女 だから、ちよつと黙って下さい。お父さんは。

男2 …はい。

女 （男1に駆け寄る）ごめんね。あなたを悩ませる人はもういないわ。

男1 …。

女 これからは、あなたはスーパードイツ人として生きて。そうすれば、お父さんも結婚を認めて下さるわ。

男2 え…あ、いや。

女 ドイツ人なんかやつつけちゃつてよ。

男1 …。

女 ねえ…どうしたの？

女、男1に触れる。男1、倒れる。

女 イヤー！死んでる！

女、男2を殴る。男2、倒れる。

女 ドイツ人最低！ドイツ人なんかみんな死んじゃえばいいのよ！ドイツ人全滅！全滅、全滅、全滅！

男1、起き上がる。女をはたく。女、倒れる。男1も倒れる。

男1と女、うなされながら目を覚ます。非常に暑そうな仕草。男2はピクリとも動かない。

男1、生あくびを繰り返す。

女 あー…。

男1 …。

女 嫌な夢だった。

男1 ミルクガールさんも？

女 …あたしはモンシロチョウになりたかっただけなのに。

男1 ええ、物騒な夢でしたよ。全滅がどうか…。

女 え、同じ夢…。

男1 …この、紙。メモ？（自分の頭があつた位置を指差す）

女 うん。

男1 全滅とか書きました？

女 だから、モンシロチョウ。…あと、お金持ち。

男1 僕は…彼女と会いたい…つてのと。

女 アゲハ蝶？

男1 そうそう。

女 てことは…。

女と男1、男2を睨む。

男1・女こいつの趣味か。

女 けえ！（男2を蹴飛ばす）

男1 あ。

男2、ごろりと転がる。女、男2の頭の下を調べる。メモを発見。

女 全滅…。

男1 やつぱり。

女 全滅…全滅全滅全滅全滅全滅全滅全滅全滅…見て。(男1にメモを渡す)

男1 うわ…びつしりだ。

女 執念ね。

男1 こりや、悪い夢も見るなあ。

女 何か…あー…もう。(立ち尽くす)

男1 …ええ。

女 ビール飲みたい

男1 ああ…サウナですね。これ。

女 ビール欲しくない？

男1 水なら買ってありますよ。

女 どころ？

男1 そこ。(女の後ろを指差す)

女、ガサガサとビニール袋を探す仕草。自分の分を確保し、男1に水を渡す。

女 梵さん。

男2 …。

女 起きて…水飲まなきゃ死んじやうよ。

男1 いいんじゃないすか。

男2 …。

女 …死んでる？

男1 え！

男1、男2に近づく。

男1 …息してますよ。

女 でも、目…覚まさないよ。

男1 ああ…。

女 いよいよ、昏睡状態ってやつかな。

男1 ああ…そろそろなんですかね。(大あくび)

女 眠いの？

男1 …ええ。

女 起きたばつかなのにね。

男1 さつきからあくびが止まらなくて…。

女 それで眠ったらさ…。

男1 …。

女 もう…起きないかもね。

男1 …ですね。

女、あくび。

女 …やっぱ、そろそろなのかな。

男1 ええ。

女 …。

男1 …。

女 …寝よつか。

男1 …はい。

女、男1、笑う。

女 お花畑で会いましょう。

男1 もういつすよ、お花畑は。

女 あら、そう？

男1 先にお別れ言っておきますね。

女 …うん。

男1 さよなら。

女 …さようなら。

二人、眠りにつく。

と、三人、起き上がる。片手にカクテルを持つ仕草。突然、大笑いする。

女 もう…ホント、冗談キツイわよ。梵ちゃん。

男2 やっぱ、やりすぎた？

女 だつて…本当に殺されるかと思っちゃった。

男1 いやあ、まんまと眠っちゃったね。

女 ホントに薬入れたの？

男2 入れるわけないだろ。

女 だよねえ。

男2 たんぼが見事に寝込んだしまったからさ…ちよつとイタズラしてやろうと思つてさ。

男1 いやあ、ぜんぜん気がつかなかったよ。

男2 でも、ホントに泣き出すとは思わなかったよな。

女 だつて。

男1 そりゃそうだよ、梵ちゃん。助けも呼べない海の上でさ、殺すの殺して欲しいのつてさ

あ…言われたらさ。

女 泣くわよ。

男2 そりやそうか。

女 女の子だもん。

男1 …。

男2 …。

女 うーん、それにしても…最上階もいいけど。

男2 ラウンジも悪くないね。

男1 ここで飲んでりや悪酔いしなかったかもね。

女 そうよ、最初からここに来れば良かったのよ。

男2 はは、じゃあ、同窓会二日目の夜に…乾杯。

三人 乾杯！（カクテルを飲み干す仕草）

男2 ふう…よーし、じゃあ、明日はどうしようか？

男1 え？

女 明日つて…。

男2 いや、だから、明日の予定。

男1 仕事は？

男2 休むわ。

女 大丈夫なの？

男2 ここんとこ、ずっと休日返上で働いてたからな。誰も責めやしないさ。

男1 そうか。

女 じゃあ、あたしも休んじゃう。

男2 お、いいねえ。

男1 平気なの？

女 ちよつと二日休むくらい、どつてことないわよ。

男1 いや、急に明日じゃ…休めないでしょう。普通。

女 いいのよ。会社員や役人じゃあるまいし。そんなカチカチじゃいい発想なんて浮かばないんだから。

男2 さすがデザイナー。

女 エッヘーン！（わかりやすく天狗になる）

男2 たんぼはどうする？

女 そうよ。たんぼくんはどうするの？

男1 僕かあ…僕は…。

女 うん。

男1 帰るよ。

男2 ええ！

女 なんでえ？

男1 そんな急には…休めないよ。

男2 何言ってるのさ、名うてのトレーダーが。

女 そうよ、公務員とかじゃないんだからさあ。もつと自由に！

男1 だめだよ。僕は…だめだよ。

男2 なあ…たんぼいなきやつまんないよ。

女 そうよ。

男1 ごめんな。明日は二人で楽しんでよ。

男2 …たんぼ。

男1 じゃあ、僕、そろそろ戻るね。

女 え！

男2 まだ早いじゃん。

男1 明日、仕事だから。

男2・女…。

男1　じゃあね、今日は楽しかったよ。

女　…ただいま。

男1　…え？

女　ただいま。

男1　…君は。

女　待った？

男1　…お帰り。

女　本当に追いかけてきちやんだ。

男1　うん。

女　…真面目だね。相変わらず。

男1　…それしか、取り柄ないですし。

男2　良かったね。

男1　…ええ。

男2　彼女、戻ってきて。

女　もう、どこへも行かないから。

男1 うん。

男2 さあ、じゃあ、もう一度乾杯しようぜ。(皆のグラスにシャンパンを注ぐそぶり)

男1 あ、いや…。

男2 飲みなよ。まだ早いじゃないか。

男1 明日…仕事…。

女 帰るの…？

男1 …。

男2 さあ…。(酒を注ぐ)

男1 じゃあ…一杯だけ。

男2 そう来なくちや。…じゃあ、二人の再会を祝して…乾杯！

三人 乾杯！

男2 いやあ、目出てえなあ。

男1 ありがとう。

男2 そういえばさ、二人の出会いは？

女 やめてよ…照れちゃうから。

男2 いいじゃないか。教えてよ。

女 そうね、あれは…。

男1 あれは、僕が大学を卒業してすぐでしょうか…二人の出会いは12年前。湘南のヨッ

トハーバーでした。彼女は赤いリボンの飾りがついた、目立つユサージュで胸元を飾っていて…あれは結婚式の帰りだったのかな。

女 うん、友達の。

男1 地方から出てきた彼女は、二、三日逗留の予定で、ホテルに向かうバスの時間を知らなかった。

男2 そこをナンパしたんだ。

男1 ナンパだなんて人聞きが悪いなあ。

女 ナンパみたいなものよ。

男1 君から話かけてきたくせに。

女 バスの時間を聞いただけじゃない。…まさか、観光案内までしてくれるとは思わなかったわ。

男2 そりゃナンパだね。

男1 ぜ、善意だよ。純粹な。ま…当時、僕はまだ就職もせずにブラブラして…遊びが
てらヨットクラブのバーでバイトしていたんだ。地元のことなんてほとんど知らなかつた
んだけど。

男2 …善意ねえ。

男1 仕方がないから、翌日は二人乗りの小さなヨットで少し沖に出ることにしたんだ。地
元のことなんて何にも知らないし。ヨットなら…。

女 そう、ヨットでね…。

男1 少し…沖に…。

男1、少し俯く。うつむ間。

男1 ごめん…やつぱは帰るよ。

男2 え、どうして？

男1 仕事があるんだ。

男2 せっかく会えたのに。彼女とさ。

男1 帰ってきたんだから。…また、いつでも会えるよ。ね。

女 会えないわよ。

男1 え？

女 あんたと私は、ここでしか会えないのよ。

男1 …そうか。そうだっけ。

女 今、行ったら、しばらくは来られないでしょ？

男1 だと…思う。

女 帰るの？

男1 …。

男2 ここにいてよ。寂しいじゃん。

女 …。

男1 うん。

男2 よーし、よく言った。乾杯だ！

男1 帰るよ。

男2 え。

女 じゃあ…さよならだね。

男1 さよならだ。

男2 どうしてだ？また会えなくなるんだぞ…彼女と。

男1 構わないよ。だって…。

女 …。

男1 彼女は…僕の頭の中にしかないんだから。

男1、ヨットの帆を畳む素振り。女、海を覗き込む。

女 うわー、ホントに海だ。

男1 そりゃ、海だよ。

女 何か怖いね。

男1 そうかい？今日は風いであるから…穏やかなほうだよ。

女 うーん、そうじゃなくて。この下、ずーつと海なんですよ。

男1 うん。

女 怖くない？

男1 …ああ、言われてみればね。じゃあ、戻る？

女
イヤ。

男1
怖いんじゃないの？

女
こんな経験なかなか出来ないから。気がつかない事にするわ。怖い。

男1
器用だね。

女
うん。(笑う)

男1
よし、メシ食おうか。

女
え、ご飯食べるの？

男1
そうだよ。そこにカレーあるからとつて。

女
カレー？

男1
そうだよ。

女
海の上でカレー？

男1
うまいよ。カレー。

女
知ってるけど。

男1
そのの、アイスボックスに入ってるから。サトウのご飯も持って来て。

女
あれ、電子レンジじゃないの？

男1
大丈夫だろ。湯煎でも。

女 何かテキストだね。

男1 文句あるなら食わなくてもいいぜ。

女 はいはい。

男1 あとはカセットコンロ…。

二人、舞台の中央で煮炊きを始める。

女 これ…あなたのヨット？

男1 そうだよ。

女 すごいじゃん。

男1 欲しかったら、意外と誰にだつて持てるんだよ。多少の出費を覚悟すれば…。

女 うーん、ていうか…このヨット維持してさ、海まで出ようつていうヤル気かね…。

男1 別にないよ、ヤル気なんて。むしろ、その逆でさ…。

男1 逆…？

女 万事ヤル気になれないんだ。正直なところ。

女 ふーん、そんな風には見えないけどね。…あたしをナンパして、海まで連れて来て。あ
とは、何されちゃうのかしら。

男1 なんにもしないよ…。

女 あら、そう。

男1 君は…なんていうか…現実感がなかったんだ。妙に。
なにそれ。

女 なにそれ。

男1 何か…もう、人間離れた…作り物みたいな…。

女 お人形さんみたいにカワイイってことかしら。

男1 そうじゃない。

女 ひどいわ。

男1 僕はさ…人間が嫌いなんだ。

女 へえ、社交的に見えるけどね。

男1 うーん、深く人間関係を結ぶのが嫌いなんだよ。遊びで付き合うなら、僕って楽しい
人間よ。

女 あら、いやなカンジ。(笑う)

男1 ヨットは…海に出れば、一人になれるからね。

女 私ならズツとしないけど…こんな広い海の上で一人だけなんて。

男1 何かね…。

女 うん。

男1 ずっと夢を見ているような気がするんだ。

女 夢？

男1 そう。…全てが他人事みたいな感じ。

女 へえ。

男1 だからね、人間が持つてくる感情が、僕には面倒事としか思えない。好きとか、嫌い

とかさ。

女 哀れね。

男1 そうかな。

女 好きとか嫌いとか、あるから人生は楽しいんじゃない。

男2 それが毘さ。

男1 え？

男2 君は好きなんだろ。泣いたり、笑ったり、怒ったり。感情を動かすのが。

女 そうよ…好きよ。

男2 疲れないか？

女 何が？

男2 男に振られたと言っちゃあ泣き、腹が空いたといつては不機嫌になり、誰それに無視されたから怒る…毎日。でも、不思議だ。人間は、次に何かいいことがあるかもしれないと信じてしまう。

女 そりゃそうよ。実際にそうなんだから。

男2 そう、そして実際に起こる。良いことが。喜びは人間を有頂天にするが、その高みは、次の絶望に突き落とされるための準備に過ぎない。失恋、空腹、友人の裏切り、病氣、怪我、疲労、解雇、肩こり、老化、離婚、熟年離婚、自分の醜い顔。

女 何て暗い考え方をするの。そういうのをひつくるめて人生なのよ。

男2 そういうのをひつくるめて、人生だつていうのならさ。人生そのものを止めてしまえば、いつそスッキリする。

女 あんた、生きていたくないの？

男2 僕が嫌なのはこの心の揺れだ。快から不快へ、不快から快へ。このサーキットをバカみたいに何周もしているうちに、いつか疲れてしまったんだ。僕の心は。な。(男1)

男1 え？ああ、まあ。

男2 だったら、人生そのものを止めてしまえばいい。世界はこの頭の中にしかないんだから。人生を止めれば、世界も止まる。僕が死ねば、世界なんかあつたかどうかとも分からない。
い。
女 ……
男2 どうだい、スッキリするだろ？
女 あんた、よっぽど面倒臭がりね。
男1 ああ、そうかもしれない。
女 いいわ、じゃあ死んだらいいわよ。ただね…。
男1 うん？
女 あんたが止まれば、あんたは止まるのよ。
男1 当たり前だ。
女 そうすれば、あんたなんて居たかどうかともわからないわ。
男1 ……
女 自分の頭の中に、自分ひとり居させてやれないんだから。そんなヤツは誰の頭の中にも居させてはもらえないわよ。
男1 ……

女 消えなさい。足跡ひとつ残さず。誰かに聞かれたら、あんたなんか知らないって言つてあげる。

男1 …。

女 親はいる？親戚は？

男1 いるよ。

女 じゃあ、良かったわね。親と親戚がいるうちは、この世界にいたことにしてもらえるわ、こんなあんたでも。友達や彼女は？

男1 …。

女 いやしないか。さらつと遊んでさようならつて人だもんね。あんたは。

男1 …。

女 もういいや…船を戻してちょうだい。寒い。

男1 …。

女 ちよつと、聞いてんのあんたは。早くして。

男1 …。

女 は…まさか、手始めにあたしから消す気じゃないでしょうね？や、やめてよ…あたしには夢も希望も親も親戚も友達も…彼氏は居ないけど。

男1 …カレーは。

女 …え？

男1 カレー。

女 …。

男1 食わなくていいのか？

女 …食べる。

三人、グラスを手に持つ姿勢に戻る。

男1 それから、僕は彼女に執着した。彼女は僕の頭に住み着くことに成功し、僕も僕の頭の中に住み着くことが出来るようになった。僕の感情は振れ幅を増し、今まで以上に快感と不快感を往復するようになった…にもかかわらず。

男2 疲れは感じなかった。

男1 ああ。やっと、世界に住めるようになったんだ。

男2 さすがだね。女は偉大だ。

男1 …ところが…。

女 …。

男1 …彼女は死んだ。突然。

女 …。

男2 どうしてさ？事故かなんか？

男1 知らない。自殺ってことになってるけど。…彼女の引き出しに消費者金融のカードが

あつたから。大量に。全部限度額いっぱいまで使ってたみたい。

ねえ、どうして？（女に）

…。

男2 本人いるんだから聞いてみたら？

…。

男2 ねえ、どうして死んだの？

女 死んでないよ。

男1 え？

女 最初からいなかったんだよ。

男1 …最初…から？

女 全部、あんたの頭の中の出来事。あたしなんか、居たかどうかも分からない。

男2 健気ね。

女 はい？

男2 私の事なんか早く忘れなさいってことね。早く次の恋を…。

女 そうじゃなくて。

男2 は？

女 あんただってそうじゃない。

男2 …え。

女 全部、この人(男1)が作ったストーリーよ。死ぬための。

男2 …どういうこと？

女 この人は死にたいのよ。理由が必要なのよ。だから、都合よく作ったのよね。自分の納得のいく人間関係を。

男2 えーつと…だから…。

女 あんたは、この人の頭の中の登場人物。

男2 つまり…僕は。

女 本当にいたかどうかも分からないわ。

男2 死にたい僕も…金持ちの僕も…。

女 そうよ。

男1 ……そうだったけ。

女 そう。

男1 ……。

男2 明日は、どうする？

男1 え？

男2 もういいや、そんな事はどうだって。…君はたんぼで、お前はミルクだ。

男1 ……うん。

男2 とりあえず、今日はもう一泊するつもりだ。明日は……どうしようかな。

女 すればいいじゃん。何泊でも。

男2 そうね、金の続く限りは。

女 明日は江ノ島行こうよ。

男2 ああ、いいね。行こう。…たんぼは、行かない？

男1 ……。

男2 どうする？

男1 ……どうしようかな。

女 ここに居るのも、悪くないわよ。

男1 …うん。

女 ここは、いいところだから。ね。(男2に)

男2 うん。

男1 …帰るよ。

男2 そうか。

男1 仕事、あるから。

男2 真面目だなあ。たんぽは。

女 じゃあ、お別れだね。

男1 また、会おうよ。

女 …そうだね。

男1 梵ちゃんも。

男2 ああ、じゃあ、しばらくここで遊んでるわ。

男1 ああ。

男2 待つてるぜ。

男1 ああ…さよなら。

男2 さよなら。

女 さよなら。

ぼたりと倒れる男1。男2と女、正面を切る。男1、男2と女がしゃべりだすと同時に腹ばいになって苦しそうに動き出す。「暑い」、「水」、「仕事行かなきゃ」…などと呟きながら。そでに向かつてはける。

男2 それつきり、たんぼは僕らの前に姿を見せなくなった。

女 もう、このクラブハウスに何泊しているだろう。

男2 今では、あいつが居たのかどうかさえ、たんぼという友人が俺たちの間に居たのかどうかさえ分からない。

女 別に、毎日楽しいからいいんだけど。

男2 僕たちは、来るのかどうかも分からない友人を待ちながら、今日も遊び疲れて眠る。

女 たんぼくん、今頃なにやってるんだろう。

男2 仕事じゃない？

女 そうだね。きつとそうだ。…あの人、真面目だから。

男1、はけ切る。

完

※本作品を使用して上演する場合には、事前に権利者の許可を受ける必要があります。また、上演したものを記録する場合は、作者に上演ならびに複製(記録映像作成)許可料を支払うことで、脚色・改変等含めての使用と、上演したものを映像等に記録することが出来るようになります。

○上演ならびに複製許可料について

アマチュア・学生団体の無料での公演でも、原則として 5000 円を頂戴します。
プロの団体の公演(有料・無料問わず)、及び、アマチュア・学生の団体の有料での公演については、座席数・ステージ数・チケット料金等を考慮して金額を提示させていただきます。

○非営利・無料・無報酬での上演

著作権法第 38 条 1 項により、非営利・無料・無報酬での上演について、無許諾かつ著作権使用料無料での上演は可能です。ただし、第 50 条の「著作者人格権に影響を及ぼすものと解釈してはならない」という条文により、これには以下の条件が付加されます。

- ・ 作品名と作者名を明示する。
- ・ 台本に変更を加えない。題名も変更しない。
- ・ 上演の映像・音声記録をしない。またそれを勝手に複製して配ったり販売したりしない。
- ・ 非営利な活動である。(営利団体からの協賛・後援等も受けない)
- ・ 入場料などを受け取らない。(おひねりやカンパ、グッズの売り上げも含む)
- ・ 上演に際して、誰も報酬を受け取らない。(交通費など最低限の実費は除く)

以上の条件を満たせば、著作権法上は作者に断りなく本作を上演できます。
しかし、できることなら以下までご連絡頂きたい。



劇団！王子の実験室

O-Ji laboratorium

主宰 田口 浩一郎

Koichiro Taguchi

〒231-0054 横浜市中区黄金町2-7先 黄金スタジオD
Tel. 090-4926-9732

✉ oozino@icloud.com



よろしくお願ひ致します。